

月夜にゾウがはしごを上っていく

清水鱗造

灰皿町

アゴヒゲを生やした蟻が行列して破線をつくる

海への高架道路がきれいに湾曲しているのを見ながら、あの道路を走る路線バスに乗ってみたいと思う。この時代になってから、実用本位の移動スピードを求めてチューブに流れて走る乗り物を使い、走行中の景色も気にせず目的地に着くのは味気ないと思っっている。

一種の懐古趣味の乗り物になってしまいが、古さを装って塗料が剥けているバスや数両編成の電車を使いたい。装っていても「いい味」が出ていればと思う。しかしほんとうは乗り物のことをじっくり考えたりするのは、日常の仕事を終えてからの楽しみだつた。「メリハリがないと、小さな楽しみが風を持っていかれてしまう恐れがある。やはり時間の使い方は緩急がないと生体がリズムを受け取れない」と漠然と意識することがある。

地面を見ていると、すつきりした舗装道路と少し劣化して側溝に向かって崩れているようなところの対立、雑草が茂っているところと豆の花がたくさん咲いている畑の対立などある。これらの景色も、連続的な変化の過程で表せないこともないと思う。新しく見える舗装道路が自然に劣化している道路では「度合い」が変化していて、半分新しく舗装してはつきり境目があるのではない。場所によってゆるやかに劣化している。雑草

のなびく野はよく手入れした畑とは境目があるが、常に雑草はゆるやかに畑に侵入しようとしていて、繰り返し攻めて不連続をなくす力を働かせている。

「そんなに理屈っぽく景色を見ながら散歩しているの？」と木々の間からバニーガールが出てきた。うっかり理屈っぽくしているときに、バニーガールのような力動的なものが出てくるのもまたいいと思う。出てきたバニーガールは、木の幹が水平になっている部分に足を自慢するようにして座っている。散歩の途中にいきなりバニーガールが出てくるのは、ホラーな物語で下水道からジョーカーのメイクをした男が出てくるようなものじゃないか、とも思う。

ぼくは、ちらつとまともにバニーガールを見てしまう。そうなると向こうから「どこを見てるの？」と言ってくるに決まっている。そのときには、「あなたが座っているとこの近くに大きな蟻が歩いていましたのでちよつと見つめてしまつて」とごまかすのだが、バニーガールはぶんつと横を向いてしまうのだった。まいったな、と思つて橋脚のコンクリートのほうに目を逸らせてから目を戻すと、彼女はもういない。ひよつとして、バニーガールはぼくだけのために現れたのではないかと思う。バニーガールの衣装は凝っているので、野原に続く道に何度も現れるにはコストが高すぎる。これは一回でストーリーを決めようとしているのではないか、と捜すと木の根元から本物のウサギが

ぴよんぴよんと近づいてきた。ああ、単なる見間違いかと思ってウサギを見てみると、気軽に近づいてくる。ウサギの顔を見ると、長いつけまつげを付けている。ほう、ウサギのためのつけまつげも売っているのかと思う。

このバニーガール出現からウサギのつけまつげまでの成り行き、これは歩きながらぼつぼつと現れる映像を記しているのだが、なにか色っぽいウサギだ。それにバニーガールと友達になると、身の回りをきれいに保つように説教されそうだが、ウサギは単純に色っぽい野を走り回って先導してくれる。

ここで、ウサギに鉛筆とノートを持たせてはいけない。ウサギがうじゃうじゃ群れている地方の童話になってしまう。民話にするにはつけまつげがすでに過剰な映像だ。

つけまつげウサギは、ふっと道端の空き缶の溜まり水に吸い取られた。「カニ缶」という文字がシールに見える。どんな気分でウサギはあんな小さな缶の水に溶けたのだろうと思うまでもなく、カニ缶のそばを蟻の行列がまさに通過するところだ。さっきのウサギはつけまつげで色っぽかったが、今度の蟻たちはアゴヒゲが生えている。小さいながらアゴヒゲをなびかせながらカニ缶のそばを通っている。それに爪楊枝もみんな持っているようだ。爪楊枝を歯の間に挟み、シーハーシーハーと食事の後のように歩いている姿がみんな同じだ。とはいうものの蟻は小さいので、虫眼鏡で様子を見る。

カニ缶のシールは風景画だ。漁村の港の風景に「カニ缶」と赤い字で書いてある。この空き缶のシールの絵の湾岸を走る道路に古い路線バスが走っている。ところが、カニ缶のシールの広さはたくさんのお話の要素を詰め込むには狭すぎる。しかし、夏休みにはこの限定された面積のシールの絵を舞台にして、遊びの空間をまとめるのもおもしろいかもしれない。

常に横道に入るのが散歩のリズムを作るコツだ。ちよつと絵の中を歩いてくることにする。浜に下りる場所はよくある草原で、ハマカンゾウなどの海浜植物が交じっている。シールの絵の青い海と船は外側から見えるが、草原はちよつど絵の下のほうに当たるので見えない。絵には見えない石垣に這わせてあるロープにつかまって石階段を下りて、浜に出て数メートル歩くと、ぼくが絵のなかに出現する。そのとき、カニ缶のシールの風景画には一人の男の形が加わる。

ぼくは浜の近くの宿に泊まっていて、お昼ごろ散歩している映像なのかもしれない。白い船は観光船らしいが、甲板から浜を歩いているぼくを見ている男の話につながるのは空間が複雑になりすぎる。あくまでシールのような狭い面積に、とても短い時間の推移がある物語が披露される。同時に、つけまつげをつけたウサギが吸い込まれたカニ缶の水の中の話、カニ缶のそばを通るアゴヒゲのある蟻の行列の話、の三つの話が橋脚の